

2025年度 成人科テキスト

ぶどうの木

第3号



神は言われた。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神は見て良しとされた。地は草木を生じさせ、神は見て良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

創世記 1 章 9-13 節

名前 _____

常盤台バプテスト教会 「教会の約束」

私たちは、神のめぐみによってイエス・キリストを主と信じ、バプテスマをうけて、主の教会に加わったので、聖霊の助けにより喜んで互いにこの約束をいたします。

私たちは、聖書が信仰の規範であることを信じ、その教えに従います。

私たちは、この教会が人によって成ったものでなく、神によって成ったものと信じます。

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛しあい、互いの喜びと悲しみを共に分けあいます。

私たちは、この教会をささえ、全世界に主の福音をのべ伝え、神のみむねの行われるために、喜んで奉仕し、献金をいたします。

私たちは、日々の祈りと家庭の礼拝につとめ、神よりあずかった子供たちをみむねにそうように教え育てます。

私たちは、きよい心と正しい行いをもって、まことの道をあらわし、隣り人を愛し人々を救い主に導きます。

私たちは、主と会う日まで、この約束を守ります。



8/10	第13課「主の日の礼拝を守り主をたたえ」	・・・P.4
8/17	第14課「教会の集まり」	・・・P.6
8/24	第15課「バプテスマ」	・・・P.8
8/31	第16課「主の晩餐式」	・・・P.10
9/14	第17課「教会のきよくなること」	・・・P.12
9/21	第18課「教会の栄えること」	・・・P.14
9/28	第19課「教会がきよくなること栄えることを祈る」	・・・P.16

執筆担当：第13～16課 栗山 義亜 兄 第17～19課 田中 由記子 姉
表紙イラスト：友納 聖子 姉

第3号の参考図書

「バプテストの教会契約」 1993年 村椿真理 ヨルダン社
「教える喜びと学ぶ喜び」 2009年 朴永基 いのちのことば社
「バプテストの信仰」 2015年 日本バプテスト連盟宣教研究所
「人生を導く5つの目的」 2015年 リック・ウォレン PDJ
「聖書教理がわかる94章」 2016年 J・I・パッカー いのちのことば社
「バプテスト教理問答書」 2004年 鈴木昌 訳編 東京聖書教会
「10代から始めるキリスト教教理」 2022年 大嶋重徳 いのちのことば社

わすれないで

G A7 D7 G

わ す れ な い で い つ も イ エ ス さ ま は
 だ け ど い つ か は げ し い あ ら し が
 わ す れ な い で か な し み の よ る は

G7 C D7 G

き み の こ と を み つ め て い る
 き み の ほ ほ え み ふ き け す で し ょ
 き ば う の あ し た に か わ る こ と を

G7 A7 D7 G

だ か ら い つ も た や さ な い で
 だ か ら い つ も は な さ な い で
 だ か ら す ぐ に と り も ど し て

C Am D7 G

む ね の な か の ほ ほ え み を
 む ね の な か の み こ と ば を
 い つ も の き み の ほ ほ え み を

1

忘れないで いつもイエス様は
 君のことを見つめている
 だから いつも絶やさないで
 胸の中のほほえみを

2

だけど いつか激しい嵐が
 君のほほえみ吹き消すでしょう
 だから いつも離さないで
 胸の中の みことばを

3

忘れないで 悲しみの夜は
 希望のあしたに変わることを
 だから すぐに取り戻して
 いつもの君のほほえみを

愛をもって生きていこう

Words & Music by
Takafumi Nagasawa



愛をもって生きていこう
互いに手を取りあって
イエスのため生きていこう
愛の光の中を

私の人生は愛が満ちあふれる
愛し合う心をイエスは教えてくれた

第13課 「主の日の礼拝を守り主をたたえ」

～8月の約束文～

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

私たちは毎週日曜日に神さまに礼拝をお捧げしています。コロナ禍を経て、今ではオンラインで場所は違っても同じ時間に礼拝に与ることができます。また、録画された礼拝を異なる時間でも共に捧げすることが可能になっています。そもそも主の日の礼拝とはどういうものなのでしょうか。聖書に聞いてみましょう。

詩編95編 6－7節

わたしたちを造られた方 主の御前にひざまずこう。共にひれ伏し、伏し拝もう。
主はわたしたちの神、わたしたちは主の民 主に養われる群れ、御手の内にある羊。今日こそ、主の声に聞き従わなければならない。

マルコによる福音書 2章27節

そして更に言われた。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。

マタイによる福音書 11章28節

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。

詩編 23編 1－3節

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。
主はわたしを青草の原に休ませ/憩いの水のほとりに伴い
魂を生き返らせてくださる。
主は御名にふさわしく/わたしを正しい道に導かれる。

1. 「主の日」について

旧約の時代には6日間の天地創造に続きお休みされた7日目を安息日（土曜日）とし、創造のわざ、贖いのわざを覚えて守ることを命じられていました。ユダヤ教では安息日にしてはいけない39種類の禁止事項があり、イエスさまの時代にも厳しい宗教的戒律とされていました。新約の時代にはイエスさまが復活された日が週の初めの日（日曜日）であったことがキリスト者にとっての「主の日」となりました。ですから「主の日」には日々の仕事やこの世での日常の作業から離れ、礼拝を守り、主をたたえ、ただ休息するというよりも、神さまの為に時間をささげ、神さまに心を向ける時に、疲れた魂を生き返らせて頂く時とすることが大切なのではないのでしょうか。

創世記 2章1－3節

天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なさった。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさったので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

2. 「礼拝を守り」について

「礼拝」とは神を敬い、褒めたたえ、感謝し、神に仕えることを指します。私たちが毎週守り続けている主日礼拝は常盤台教会の初代牧師の松村秀一先生、草創期の教会員の方々から代々引き継がれ、現在の形として守り、継承されています。ですので、これが私たち常盤台教会の礼拝であると言えます。また、多様化した現代では主の日であっても様々な理由によって就労をしたり、健康上の理由等から主の日の会堂礼拝に集えないこともあります。「礼拝を守る」とは自身の信仰に照らして可能な限りの礼拝の機会を見出し、いずれかの主の日の礼拝出席が叶うように努めることを神と会衆に約束することではないのでしょうか。

あと、礼拝を「(神さまに) 捧げる」ではなく、なぜ「守る」という表現なのか。ネットで調べた限りではクリスチャンにとって日曜日に礼拝を捧げることは義務に近いものであり、暗黙のルールと言えるので、「(そのルールを) 守る」となっていました。私たちはいま学んでいる「教会の約束」を「守る」と言えますね。

聖書には「礼拝を守る」という表現はありませんが、多くの「守る」という表現が使われており、「安息日を守る」から「安息の日に行われる礼拝を守る」と来ているともありました。この表現はキリスト教系の宗教のみに使われている独特な表現とのことでした。

ヨハネによる福音書 4章23-24節

しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。

ローマの信徒への手紙 12章1節

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。

3. 「主をたたえ」について

「主をたたえる」ことも礼拝の中に入っているのに敢えて記されているのには理由があるのでしょうか。私はひとつの理由として賛美があげられるのではないかと思います。常盤台教会は礼拝のプログラムの中に賛美が多くありますし、賛美を歌う音楽奉仕グループが多いこと、音楽に秀でた方が多いことも特徴といえます。また、「主をたたえる」で思い浮かぶのは詩編です。神さまへの賛歌、賛美が詰まっています。

詩編 100編1-4節

全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。/喜び祝い、主に仕え
喜び歌って御前に進み出よ。
知れ、主こそ神であると。/主はわたしたちを造られた。
わたしたちは主のもの、その民/主に養われる羊の群れ。
感謝の歌をうたって主の門に進み/賛美の歌をうたって主の庭に入れ。
感謝をささげ、御名をたたえよ。

話してみましょう

- 皆さんは日曜日を「主の日」として平日とは違う特別な日とされていますでしょうか。
- 今の私たちの礼拝にあったら良いものがありましたら分かち合ってみましょう。
- クリスチャンならではの表現、会話等をしていて「この方はクリスチャンかな」と感じた時がありますでしょうか。

～～おまけ～～

現代の安息日について。

現在のイスラエルでは人口の75%がユダヤ教徒、このうち安息日をしっかりと守っている人は25%。部分的に守っている人は14%。守っていない人が60%とのこと。「人命にかかわる」とみなされるもの、救急車・消防車・警察車両・軍事行動は出勤可。また、「電気の作動が火をつける行為に当たる」とされ電化製品が使えない（テレビやエアコン等を付けっぱなしにしておくのは良いのだそうだがボタンは押せない）。「スマホが使えない」というのが、逆に週に一回、一日間スマホから解放される。家族とのゆったりとした時間が持てるという意外な良い効果が出ていると朝日新聞の記事にありました。

(紛争の始まる前の記事です。一日でも早く終息しますように。)

第14課「教会の集まり」

～8月の約束文～

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

皆さんは「教会の集まり」というと何が思い浮かぶでしょうか。

「礼拝」から始まり、この「成人科の学び」「祈祷会」「各会の例会や集まり」「愛餐会」「各奉仕グループの活動」「会堂清掃」等々挙げるともっとたくさん出てくるかと思います。中には「私は礼拝出席だけ」という人もいるかもしれませんが、敢えて「礼拝」と「二つの礼典」の間に「教会の集まり」の記述があることに意味があるのではないのでしょうか。

1. 初代教会の交わり

初代教会の人たちは少数の人たちで信徒の家やシナゴークに集まっていました。これは「家の集会」といわれ、食事を共にしながら支えあい、祈りあいながら信仰生活を送っていました。また、持ち寄った食事が余れば貧しい人たちのもとへ届けたりしていました。実はこれが大切なことで、霊的な健康、人格的な成長のためには、このような集まりでの交わりが必要であるとパウロは語っています。現在、家庭集会などはなかなか出来なくなりましたが、その代わりとして「教会の様々な集まりにつとめて出席する」ことが、重要なことであると言えると思うのです。

使徒言行録 2章42、46－47節

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。



2. 「ひとつ」となるために

「教会の約束」は私たちが神さまの前に「思いをひとつ」にして従っていくこと。「思いをひとつ」にするためには私たちの中で調和を保つこと。調和を保つためには互いの違いをお互いに受け止めるだけでなく、共通点に目をむけることも重要です。

クリスチャン、神の民である私たちはキリストにより「ひとつの体」「ひとつの目的」「ひとつの希望」「ひとつの信仰」「ひとつの洗礼」「ひとつの愛」を共有しており、「同じ救い」「同じ命」「同じ将来」に預かっています。お互いの違いより大切なものに目を向け、教会の集まりにつとめて出席することが2025年の年間聖句及び年間標語を実現していけるのではないのでしょうか。

エフェソの信徒への手紙 4章16節

キリストにより、体全体は、あらゆる節々が補い合うことによってしっかり組み合わせられ、結び合わされて、おのおの部分は分に応じて働いて体を成長させ、自ら愛によって造り上げられてゆくのです。

ローマの信徒への手紙 12章4－5節

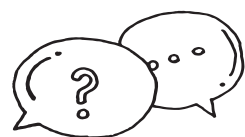
というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。

年間聖句 エフェソの信徒への手紙 4章13節

「ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。」

年間標語

「主に聞き、繋がり、励まし、共に歩もう。」



話してみましょう

- 各々の参加されている教会の集まりを挙げ合ってみましょう。
- 教会に集っている時に「私たちはひとつ」と感じたことはありますか？
- 以前は家庭集会が各地区でおこなわれていました。経験のある方はどんな感じであったかを皆で共有しましょう。

第15課「バプテスマ」

～8月の約束文～

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

私たちのバプテスト教会では「バプテスマ」と「主の晩餐式」の二つを「礼典」として選びとり守っています。今回は「二つの礼典」と、「バプテスマ」に焦点をあてて共に学んでいきましょう。

1. 「礼典」について

カトリックでは秘跡（サクラメント）と呼ばれるものが7つあり、「7つの秘跡（ひせき）」と呼ばれ、「洗礼」「堅信」「聖体」「ゆるし」「病者の塗油」「結婚」「叙階」があります。

バプテスト派をはじめ、プロテスタントの多くはバプテスマ（洗礼）と主の晩餐式（聖餐・せいさん）の2つを礼典とすることが一般的です。

また、「7つの秘跡」が「人を救う手段のひとつ」とされており、宗教改革時にプロテスタント派は「これらの儀式を受ければ神さまの恩寵が受けられるという儀式化が信仰の妨げになっている」として、聖書に明確に記されているのは洗礼（バプテスマ）と聖餐（主の晩餐式）のみとし、「2つの礼典」として定めた。

私たちバプテスト教会も2つの礼典を「人を救う手段」としては考えてはおらず、「人を救うことが出来るのはイエスさまのみである」と告白しています。

2. 「バプテスマ」について

バプテスト教会（バプテスト派）の特長として浸礼（頭まで水に浸かるバプテスマ）を重視しています。浸礼によるバプテスマは真の神さまへの信仰を体現した目に見える信仰告白です。頭まで水に浸かることでキリストと共に葬られ、キリストと共に新しい命に甦るということを象徴する形を守っています。

マタイによる福音書 3章1-2, 5, 13, 15節

そのころ洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒野で宣べ伝え、「悔い改めよ。天の国は近かった」と言った。そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところに来られた。彼から洗礼（バプテスマ）受けるためである。

しかし、イエスはお答えになった。「今は、止めないでほしい。正しいことをすべて行うのは、我々にふさわしいことです。」そこで、ヨハネはイエスの言われるとおりにした。

3. 「献児式」について

それと、もう一つの特徴としてバプテスト教会では幼児洗礼というものはおこなわず、その代わりとして献児式をおこなっています。本来、献児式は教会と信徒家族が神さまより預けられた幼子が神さまを告白できるように養育することを表明するものです。本人が自分の意志で主を生涯の「救い主」と信じ（自覚的信仰）、その決心を言葉で示し（信仰告白）、バプテスマを授かります。現状は幼児祝福式の様相に近いことが皆さんと考えてみたいことです。

また、「クリスチャン」（キリスト者）という言葉は初代教会時に「イエスさま」を信じる者に付けられた「クリスチアーノス」ギリシャ語で「小さなキリスト」を意味する「あだ名」（初めは悪口）から生まれたそうです。同じく「バプテスト（バプテスマ主義者）」という言葉も「聖書に記されている全身を水に浸すバプテスマ（浸礼）」をおこなうことを重視する信者たちに付けられた「あだ名」であった言葉を自分たちのグループ名としました。それが時代を経てバプテスト派、バプテスト教会とその考え方が受け継がれています。

ローマの信徒への手紙 10章9－10節

口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。 実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。

使徒言行録 11章26節後半

（バルナバとサウロの）二人は、丸一年の間その教会と一緒にいて多くの人を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。

ローマの信徒への手紙 6章4節

わたしたちは洗礼（バプテスマ）によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。

話してみましょう

- 6月の村椿真理先生の「教会の約束の学び会」での学びもふまえ、バプテスト派が誕生した経緯について分かち合ってみましょう。
- 浸礼によるバプテスマを自分が体感し、また、他の方が受ける礼典に参加され、どの様に感じましたか。
- 幼児洗礼を認めない、その代わりとして献児式（幼児祝福式）をおこなっていることについて話し合ってみましょう。

～～おまけ～～
カトリックの「7つの秘跡」（サクラメント）について

「洗礼」（バプテスマ）：キリストの福音を生涯の指針・目標として受け入れる決意を公に表明し、神様の子ととなり、永遠のいのちを受け、それに必要な支えを頂く秘跡。

「堅信」：洗礼・聖体とともに入信の秘跡のひとつです。洗礼を受けた人は、その信仰をさらに強め信者としての生活に必要な恵みを受けるため、堅信の秘跡を受ける必要があります。

「聖体」（主の晩餐式）：パンとぶどう酒がミサ中に司祭のことばによってキリストの体と血に変化する秘跡です。ミサに与り聖体拝領をすることによって私たちはキリストと一致し、キリストとともに神に自ら奉獻をします。

「ゆるし」（告解）：神様の御前で悪かったと思えることを司祭に告白して、神様のゆるしを頂く秘跡です。

「病者の塗油」：肉体的、または精神的に大きな危機に際して、神様のみ旨に従う決意を固め、神様の力づけを頂く秘跡です。

「結婚」：信者同士の場合には、結婚する二人を通して三位一体の神様の愛をこの世で示し実現する秘跡です。結婚についてのキリストの教えを学び、二人の心のきずなが神様によって変わらないものとされるために、結婚式は司祭と二人の証人の誓いを交わすことにより秘跡は成立します。

「叙階」（じょかい）：聖職者を任命する秘跡。キリストから使徒たちにゆだねられた使命を世の終わりまで教会において果たさせ続ける秘跡です。

第16課「主の晩餐式」

～8月の約束文～

私たちは、主の日の礼拝を守り主をたたえ、教会の集まりにつとめて出席し、バプテスマと主の晩餐の二つの礼典を守ります。

今回は「二つの礼典」のもう一つである「主の晩餐式」について聖書を通して共に学んで参りましょう。

1. 「主の晩餐式」について

イエスさまが最後の晩餐で弟子たちとパンと葡萄酒を祝し、共に食したことを記念し、追体験する儀式です。(カトリックでは、聖変化により実際にキリストの肉と血に変化するとされています)

キリストが世に残された教会に集められた私たちがキリストと兄弟姉妹の間に交わした契約を守るように互いに励まし、助け合っていくものです。教会や教派により「主の晩餐式」をいつ、どのように執り行うかは理解がわかれますが、私たちの常盤台教会では毎月の第一主日と必要を認めたときに与えています。

コリントの信徒への手紙一 11章23～29節

わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。

マタイによる福音書 26章26～29節

一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。」また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。言うておくが、わたしの父の国であなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」

2. 主の晩餐式と教会の約束

主の晩餐式の初めに、今、私たちが学んでいる「教会の約束」を皆で唱和しています。この「教会の約束」を守ることを「主の晩餐式」を通して、神さまと信仰共同体にむけて毎月改めて再契約をしています。私たちバプテスト教会は個の自覚的信仰と信仰共同体としての信仰、どちらも同じように大切にしています。私たちは毎月再契約するとなると、「しっかり守らないと」と考えてしまいがちです。

6月にあった村椿真理先生の「教会の約束の学び会」での用語説明資料の終わりにこんな文章がありました。

「教会契約（教会の約束）にふさわしく生きることは、完全にそれを守るかどうかよりも、契約の志に共に参与しているという事実が、聖霊によって私たちに『信頼して委ねて生きる人生』を与えてくれるのである。」

「契約の志に共に参与する」とは難しい表現ですが、「教会の約束にある信仰の形を共に目指して歩んでいく」と言い換えられますでしょうか。私たちが約束したのだからと無理をして実施していくのではなく、「聖霊の助けに委ね、それを行うことが出来る自分に変えさせて頂いていく」という歩みを伝えて下さっています。

エフェソの信徒への手紙 4章12－13節

こうして、聖なる者たちは奉仕の業に適した者とされ、キリストの体を造り上げてゆき、ついには、わたしたちは皆、神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になり、キリストの満ちあふれる豊かさになるまで成長するのです。

ローマの信徒への手紙 14章18－19節

このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。」

3. 「種なしパン」について

イエスさまが最後の晩餐で口にされたパンは種なしパンだと言われています。元々、過越の祭りに「奴隷解放を記念して食べるパン」であったものです。聖書において「パン種」は罪の象徴として扱われており、パン種の入っていないパンは「罪のない生活の喜びや健全さ」を象徴したもので、「罪のないイエスさまを象徴したパン」となりました。当時、小麦は贅沢品として扱われていたので、大麦あるいはスベルト小麦（古代小麦）のパンであったのではないかと云われています。健康には良さそうですね。

コリントの信徒への手紙一 5章6－8節

あなたがたが誇っているのは、よくない。わずかなパン種が練り粉全体を膨らませることを、知らないのですか。いつも新しい練り粉のままでいられるように、古いパン種をきれいに取り除きなさい。現に、あなたがたはパン種の入っていない者なのです。キリストが、わたしたちの過越の小羊として屠られたからです。だから、古いパン種や悪意と邪惡のパン種を用いないで、パン種の入っていない、純粹で真実のパンで過越祭を祝おうではありませんか。

- ・ 毎月、主の晩餐式に参加され、どんな思いになりますか。



- ・ 主の晩餐式で「教会の約束」を唱和している時、どの様に感じていますでしょうか。

- ・ 他教会で主の晩餐式（聖餐）に預かった経験等を皆で 分かち合ってみましょう

第17課「教会のきよくなること」

～9月の約束文～

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛し合い、互いの喜びと悲しみを共に分け合います。

教会は神さまが私たちにお与えくださったものですから、きよいものです。しかし、そこに集う私たちが欲にまみれ、身勝手な信仰を持って争っていたら、どうなるでしょうか？教会がきよくなるために、私たちにできることを考えてまいりましょう。

エフェソの信徒への手紙 4章22～24節

だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人を脱ぎ捨て、心の底から新たにされて、神にかたどって造られた新しい人を身に着け、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにしなければなりません。

1. 「清い」と「聖い」

「きよい」という日本語には、いくつかの漢字がありますが、今回は「清い」と「聖い」の二つについて、見ていきたいと思います。

「清い」は「よごれ・にごり・くもりなどがなく美しい」「心に不純なところがない」という意味で、英語で言うとcleanやpureです。それに対し、「聖い」は「神聖である」という意味で、英語ではholyです。「聖い」には「区分する」「区別する」という意味があり、全知全能の父なる神さまと私たちを区別する言葉でもあります。罪深い私たちはイエスさまの十字架によって贖われ、罪を赦された者となりました。しかし、私たち自身が自分の力で「聖く」なることはできません。聖なる神さまが人やものとかかわりを持たれる時、初めて、それらが「聖なるもの」になるのです。

2. 教会がきよく（聖く）なる

7月の成人科で学んだように、この教会は神さまによって造られ、神さまから与えられたものです。神さまの愛を世に伝えるために、神さまのみ心が行われるために、私たちが用いさせていただいているものです。ですから、教会では、礼拝や祈祷会、結婚式や葬儀、その他、研修会やコンサートなど様々な行事が行われますが、それらは全て神さまにささげられるものなのです。罪による汚れのない万物の創造主である神さまは聖いお方です。その聖いお方が教会にかかわってくださるので教会は聖くなれるのです。

詩編 24編3－4節

どのような人が、主の山に上り/聖所に立つことができるのか。

それは、潔白な手と清い心をもつ人。

むなしいものに魂を奪われることなく/欺くものによって誓うことをしない人。

3. 教会がきよく（聖く）なるために

神さまから与えられた聖なる教会ですが、そこに集う私たちが、この世における名誉や世俗的な欲に目がくらんで、神さまから目をそらして、的外れな歩みをする時、教会はきよいものではなくなってしまいます。私たちはイエス・キリストと出会って、バプテスマによって新しく生まれたのですから、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身につけなければなりません。

聖い神さまが私たちとかかわりを持つ意思を表してくださったことに感謝して、み心に添った信仰生活を生き、きよく(清く)されることを追い求め続ける群れとなることが私たちの幸いなのです。

ヘブライ人への手紙 12章14－15節

すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにして、だれも主を見ることはできません。神の恵みから除かれることのないように、また、苦い根が現れてあなたがたを悩まし、それによって多くの人が汚れることのないように、気をつけなさい。

テモテへの手紙二 2章21節

だから、今述べた諸悪から自分を清める人は、貴いことに用いられる器になり、聖なるもの、主人に役立つもの、あらゆる善い業のために備えられたものとなるのです。

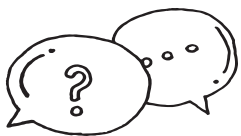
テサロニケの信徒への手紙一 4章5－7節

神を知らない異邦人のように情欲におぼれてはならないのです。このようなことで、兄弟を踏みつけたり、欺いたりしてはいけません。…神が私たちを招かれたのは、汚れた生き方ではなく、聖なる生活をさせるためです。

マタイによる福音書 5章8節

心の清い人々は、幸いである、その人たちは神を見る。

私たちは一人一人が神さまとつながっています。それは、とても大切なことです。同じ教会に集う一人一人が互いに愛し合い、認め合い、励まし合う相互牧会により、キリストを頭とする信仰共同体を作り上げていくことも同じように大切なことであり、神さまが私たちに求めておられることです。この世には誘惑がたくさんあります。誘惑に負けて、きよくない生活をしていると、神さまが見えなくなってしまいます。聖霊の導きを祈りつつ、きよくされることを追い求め続ける群れとなって、歩んでまいりましょう。そうすることで、教会はきよく(聖く)なり、私たちもきよく(清く)していただけるのです。



話してみましょう

- きよい生活を送るためには、具体的に何をしたら良いと思いますか？
- 神さまが心の中心でなくなってしまうことはありますか？
- 教会生活と社会生活の狭間で悩んだことはありますか？

第18課「教会の栄えること」

～9月の約束文～

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛し合い、互いの喜びと悲しみを共に分け合います。

「教会が栄える」とは、どのような状態をいうのでしょうか？

大勢の人が集い、バプテスマや転入会により、教会員がどんどん増え、コンサートなどの様々な行事が頻繁に行われ、活気がある教会を栄えている教会というのでしょうか？

結果としてこのようなことが起こることはありますが、一番大切なのは、神さまの栄光をほめたたえる賛美と礼拝が行われ、神の愛である福音を世の人たちに伝える使命に生きる教会であることです。

「教会が栄える」ことについて、聖書から学んでまいりましょう。

エフェソの信徒への手紙 1章6, 12, 14節

神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。

それは、以前からキリストに希望を置いていたわたしたちが、神の栄光をたたえるためです。

この聖書は、わたしたちが御国を受け継ぐための保証であり、こうして、わたしたちは贖われて神のものとなり、神の栄光をたたえることになるのです。

1. 神への賛美

エフェソの信徒への手紙1章3～14節には、神さまへの賛美が綴られています。

パウロは、まず、父なる神をほめたたえます。神さまが私たちを愛し、選び、霊的な祝福で満たしてくださったことに感謝して、たたえるのです。

次に、子なる神、イエス・キリストをほめたたえます。神のみ子の十字架の血によって私たちは贖われ、罪を赦されました。それは、私たちの力でも努力によるものでもなく、すべて神さまの恵みによるものです。

最後に、聖霊に対する賛美がささげられます。聖霊に満たされて初めて、神の栄光をたたえることができるのです。

この3～14節は原語では一文になっているそうです。心から賛美があふれてきて止まらない…神さまをほめたたえずにはいらなかったのです。

このように、神さまの栄光をほめたたえる賛美と礼拝が行われ、福音が告げられている教会が栄えている教会です。

フィリピの信徒への手紙 3章8－9節

そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。

2. 霊的な成長

教会が栄えるために、神さまが私たちに願っておられることは、霊的な成長です。

そのためには、自己中心的ではなく、神さまを中心に、世の中の富を得ることに執着するのではなく、分け合うことに喜びを抱く生活に変えられていかなければなりません。神さまの恵みのすばらしさを知る時、それまで大切だと思っていたものは、それほど大切なものではないことに気づきます。そして、何よりもすばらしい神さまの愛を一人でも多くの方に伝えずにはいられなくなるのです。

ローマの信徒への手紙 12章2節

あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。

3. 教会の栄えのために

私たちは、世に倣うのではなく、キリストに似た者とさせていただかなければなりません。この教会が神さまのみ心を行う群れとして歩んでいくために、互いに仕え合い、祈り合い、教え合い、助け合う関係を築き、何が神さまのみ旨に添うことなのか、み言葉から聞き取り、見極めることができるよう、祈り求めてまいりましょう。

弱い私たちは、すぐにこの世の誘惑に惑わされ、神さまから離れてしまうものです。また、自分の努力や能力によって、今の自分があると勘違いをして、自分自身を主張したり、自分の信仰や働きを誇ったりしてしまうこともあります。

そのような私たちですが、教会の約束を唱和する度に、教会を通して神さまの栄光を現すために、聖霊によって呼び集められたことを思い起こし、神さまをほめたたえ、感謝と賛美の祈りにあふれた教会を築いてまいりましょう。



話してみましょう

- 神さまの栄光をほめたたえる賛美と礼拝をおさげしていますか？
- 教会が栄えるために自分にできることは何でしょうか？
- 神さまをほめたたえずにはいられなかった経験を分かち合ってみましょう。

第19課「教会がきよくなること栄えることを祈る」

～9月の約束文～

私たちは、教会のきよくなること栄えることを祈り、主にある兄弟姉妹の愛をもって愛し合い、互いの喜びと悲しみを共に分け合います。

教会がきよくなるために、栄えるために、私たちが第一にすべきことは祈ることです。私たちは自分自身のことや近い人への執り成しの祈りには熱心ですが、教会のために、どれほど祈っているでしょうか。教会の様々な課題に対して、私たちの力や努力で何とかしようとするのではなく、神さまにより頼み、願い求めるとき、神さまは応えてくださいます。祈りは神さまとの対話であり、祈ることによって力と平安を与えられるのです。

フィリピの信徒への手紙 4章6－7節

どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。
そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

1. 心と考えが守られるように

教会は人の集まりです。弱く、欠けの多い私たちですから、時に、神さまのみ心とは違う方向へ進んでいってしまうこともあります。教会内の様々な課題に頭を悩ませ、心を騒がせることも少なくないと思いますが、そのような時も、何とかしようと解決策を考えるよりも、まず、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさいと聖書は語ります。私たちは神さまによって造られました。しかし、心も考えもすべて神さまにコントロールされているわけではありません。自分の心で感じ、頭で考え、判断し、選び取っていく自由を与えてくださっています。私たちの中に神さまがいらっしゃることに感謝して祈る時、私たちの心と考えはイエスさまによって守られ、その守られた心と考えはキリストの力を受けて豊かにされ、教会がきよくなるため、栄えるために用いていただけるのです。

ヤコブの手紙 5章16－18節

だから、主にいやしていただくために、罪を告白し合い、互いのために祈りなさい。正しい人の祈りは、大きな力があり、効果をもたらします。
エリヤはわたしたちと同じような人間でしたが、雨が降らないようにと熱心に祈ったところ、三年半にわたって地上に雨が降りませんでした。
しかし、再び祈ったところ、天から雨が降り、地は実をみのらせました。

2. 罪の告白

主に癒していただくためには罪の告白が大切だとヤコブの手紙には書かれています。「罪」とは「的外れ」の意味で、心が神さまから離れてしまうこと、神さまとは違う方に向けてしまうことです。

神さまではなく、自分中心になってしまったことを思い起こして、神さまに告白し、また、同じように罪を犯してしまう兄弟姉妹のことを覚えて祈る時、神さまの力が大きく働きます。

ヤコブの手紙には、エリヤの祈りについて書かれています。ここで大切なのは、エリヤはわたしたちと同じような人間だったということです。特別な能力を持っていたり、すべてにおいて完璧な人間だったわけではありません。自分の弱さ、罪深さを知っており、イエス・キリストこそ義なるお方であることを信じて祈ったので、大きな力となったのです。

ヨハネによる福音書 15章7－8節

あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば、望むものを何でも願いなさい。そうすればかなえられる。あなたがたが豊かに実を結び、わたしの弟子となるなら、それによって、わたしの父は栄光をお受けになる。

ヨハネによる福音書 15章11節

これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。

ヨハネによる福音書 16章23－24節

はっきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。

今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。

3. 喜びで満たされるために

私たちは、神さまに祈る時、イエスさまの名によって祈ります。イエスさまは私たちの罪を贖うために、十字架にかかって死なれ、三日目によみがえり、そして、天に昇って行かれました。このことによって、私たちはイエスさまの名によって神さまに祈ることができるようになったのです。

私たちがイエスさまとつながっており、み言葉がいつも私たちの内にあるのであれば、私たちが願い求めることはかなえられ、与えられますが、それは、私たちの欲望を満たすためではありません。私たちが主の喜びで満たされるためです。

教会に集う私たちが、主の喜びで満たされるとき、礼拝や賛美を通して、その喜びはあふれ出し、世の人たちにもキリストの愛が伝わり、教会が栄えることとなるのです。そのために、心を合わせて祈ってまいりましょう。



- 日々の祈りの中で、教会のことを祈っていますか？
- 私たちは、祈る時、「このお祈りを、イエスさまのお名前を通して、み前におささげいたします」と祈りますが、「イエスさまのお名前を通して」祈ることを意識していますか？
- 祈りが聞かれた経験について話してみましょう。

話してみましょう

